

仏教寺院の温泉、共同浴への影響について

樽井由紀

〔抄録〕

共同入浴についての研究は温泉、銭湯の面からなされているが、仏教寺院による施浴（寺湯）の果たした役割はあまり認識されていない。歴史的には奈良時代の光明皇后の立願風呂、源頼朝による百日施浴などが有名だが、寺院による施浴は年中行事の一部として近年まで行われていた地域がある。また江戸時代までに、温泉の源泉に薬師如来を祀る寺院や仏堂が広く普及した。銭湯が登場する以前の時代、共同入浴は仏寺との関係が深かったことがわかる。本稿では法隆寺に残る文書から戦国時代の寺湯、京都府城陽市に昭和三十年代まで行われていた東大寺二月堂を信仰する城

州一心講を信仰するオンマカプロ、奈良県山添村長久寺の「大師御夢想湯」、新潟県松之山温泉の薬師堂と薬師講の調査をもとに、共同入浴と仏教寺院の歴史的関係を具体的に検討した。その結果、近年まで存在した寺湯や、農村部の各種の講によって営まれた共同浴は、中世・近世を通じて密接に関連しており、温泉もその例外ではないことが明らかになった。

キーワード 寺湯、共同入浴、温泉、薬師堂

はじめに

日本の歴史上、共同入浴には、温泉、銭湯（町湯）に加えて、仏教寺院による施浴（寺湯）の伝統がある。歴史的には奈良時代の光明皇后の立願風呂、源頼朝による百日施浴などが有名だが、寺院による施

浴は年中行事の一部として近年まで行われていた地域がある。また江戸時代までに、温泉の源泉に薬師如来を祀る寺院や仏堂が広く普及した。銭湯が登場する以前の時代、共同入浴は仏寺との関係が深かったことがわかる。本稿では近年まで行われていた寺院による施浴の民俗学的調査をもとに、共同入浴と仏教寺院の歴史的関係を具体的に検討

することから、温泉や入浴の変遷の一端を明らかにしたい。

共同入浴についての研究は温泉、銭湯の面からなされているが、寺院による施浴（寺湯）の果たした役割はあまり認識されていない。個人の家に風呂の設備がなく、銭湯（町湯）も無い時代には、寺院の浴室や大湯屋が利用されていた。寺院では仏の功德として風呂を無料で施し、これを施行湯、施行風呂、功德湯、立願風呂等と呼び、総称して施浴という^①。寺院側では人々の参詣、信者の多いことを希望するところから、これに答えて日時を定めて浴室を開放し、しかも無料のため、これを施浴即ち「ほどこし湯」後世では「寺湯」と呼ぶようになった^②。

柳田国男はフロは室であると風呂の起源を記し、「僧徒永々の垢をこすり落とし且つ心気を養ふと称して、立籠めた浴室の中で湯氣を以て肌膚を柔げることを遣り始め、それが今日の如く一般民家にも流行するに至ったのではあるまいか^③」と風呂の始まりが僧侶のための蒸し風呂であったことを指摘している。柳田が浴法の変遷に就いて名前をあげている藤浪剛一は、風呂は蒸し風呂で蒸氣に満ちた室に入ること、湯屋は湯を沐槽に沸かしてその槽内に身体を容れて、湯につきり、多くの水を使う、と風呂と湯屋の区別をしている。藤浪は絵巻などの画像資料、文献に施浴の歴史を求め、鎌倉時代に非常に盛んだったことを論じている^④。

落合茂は衆僧施浴の思想が衆生施浴の風呂供養へと発展し、庶民の温浴思想が広がり、入浴に対する欲求が町湯の発展を促したと指摘する^⑤。八岩まどかはみそぎと佛教思想との相乗効果によって入浴の習慣

を造り上げたとし、山内昶・山内彰は文献史料をひきながら、施浴の目的が貧しい人々に佛教の目的から次第に公共的な性格を失い、親族を中心とする私的な性格に変化するとしている^⑦。これら寺湯についての先行研究は、文献資料にもとづく歴史的研究であり、寺湯を遠い過去の一時期になされたものとする傾向がある。

しかし京都府内の民俗的年中行事として、寺湯の伝統をとどめる例がある。たとえば京都府長岡京市周辺には「大師講」という行事があり、その際に施浴が行われた^⑧。柳田が藤浪の研究に対して「主として都府上流の記録に依ったもので、田舎は相変わらず目に立たずに、古くから有ったものを無くしてしまはうとして居る。わづかに残った痕跡にも注意しなければなるまい^⑨」と述べたように、寺院ではない、村での寺湯にも目を向ける必要がある。

また、温泉地で薬師を祀る寺院や仏堂には、地域住民が薬師講を作って仏事や温泉の管理を行う例、さらに源泉を寺院の境内に囲い込んで管理する例もある。筆者は温泉の民俗学的研究の一環として調査と検討を行ってきたが、これをさらに共同入浴の観点から視野を拡大し、上記の寺湯との関わりや違いを検討することを通じて、さまざまな共同入浴と仏教寺院の歴史的関係が明らかにできると考える。

一 寺湯の変遷

（一）『温室経』と『浴像経』

日本人の入浴の習慣は佛教が伝わり、寺院に浴室が置かれ僧侶に限

らず誰でも入浴するようになったことが背景にあるとされる。『仏説温室洗浴衆僧經』（以後、『温室經』とする）に記されているように、浴室は温室、温室、浴室とも呼び、七堂伽藍の整った寺院にはその中の一堂として、僧尼の斎戒と保健衛生を目的として設けられたものであった。¹⁰『温室經』は安世高訳、南朝・慧遠の注釈が伝わり、衆僧を温室（浴室、浴室）で洗浴（澡浴、沐浴）するという功德がいかに大きなものであるかということ、仏が説いたという内容になっている。七世紀の中国で流行り、その影響から道教の經典も作られた。¹¹

『温室經』がいつ日本に伝わったかは明らかではないが、正倉院文書に『温室經』、『温室洗浴經』と云うような温浴に関する經典が既に輸入されていたことがわかる記述がある。¹²この時代には既に『温室經』が日本へ輸入され、寺院に温室があり、寺院での入浴が始まっていたと言えるだろう。

もうひとつ注目すべき經典が『浴佛功德經』（以後、『浴像經』とする）で則天武后時代に義浄が訳したものである。こちらは佛の洗い方を教える經典で、各堂に安置されている金銅仏を年に一、二度洗うためのものがあった。寺院での浴室は仏像を洗うためのものでもあった。そのため浴室は湯槽の設備があるところで、浴室、浴室院とも呼ばれる。金銅製の仏像が大きい場合や木像、絵画の場合は洗うことはせず、月光を鏡に反射させて洗浴に代える方法があった。また、仏前で湯をかける所作をして湯浴に代えることもあり、次第に省略された。¹³

仏を洗う作法は現在でも四月八日の灌仏会に残っている。灌仏会は四月八日に釈尊の誕生を祝う行事で「浴仏会」「仏生会」ともいい、

一般には「花まつり」と呼ばれている。釈尊の誕生を祝うためのもので、釈尊誕生の時に、竜王が空中より香水を注ぎその身体を洗浴したということから、灌仏会の際には、誕生仏の像に甘茶を注ぐ行事が行われる。甘茶を用いるようになったのは江戸時代からであろうと言われ、それ以前は五色香水を用いていたが、『浴像經』には白檀、沈香、紫檀など一二種の妙香を湯水として用いるべきであると説いている。¹⁴

（二）寺湯の誕生と展開

このような仏典を根拠とした施浴として最も有名なものが、『元享釈書』一八巻に記された聖武天皇の後光明皇后の「立願風呂」であろう。『大仏縁起絵巻』と『東大寺縁起絵巻』に光明皇后の施浴の場面が描かれている。七堂伽藍整備の寺院に設けられた浴室は僧たちの潔斎と保健衛生のために設けられたが、参拝に訪れた人々のための潔斎浴場として別に設けられたのが大湯屋と呼ばれる建物である。¹⁵

奈良時代の浴室については、寺院の『資材帳』から確認することができる。天平一九年二月一日の『法隆寺伽藍縁起並流記資材帳』、同じ日付の『大安寺伽藍縁起並流記資材帳』にも「温室」についての記述がみられる。「温室」は奈良の大きな寺院にあっただけでなく、地方の寺々にも設けられていたようである。¹⁶

東大寺に残る大湯屋には、重源が建久八（一一九七）に制作した鉄湯船がある。重源は治承四（一一八〇）年の南部焼討で焼失した東大寺の再建大勸進となり復興に尽力した。重源は各地に伽藍復興資材を調達するために「別所」を設け、そこで働く人のための風呂を作り入

浴させた。現在も残る湯船は東大寺の工事現場で働く人々のために制作したものである。この釜で湯を沸かし、樋でその湯を湯船に送るしくみであった。¹⁷⁾

一方京都の東寺では、平安時代の創建当初から昭和三〇年代まで、大規模な大湯屋で施浴が行われていた。建物は鎌倉時代から大正時代まで、何度も焼失して建て直されているが、百合文書などの古文書から、中世の大湯屋経営が明らかになっている。橋本初子の研究によれば、東寺の湯は毎月六回、日を定めてたてられ、三月三日（上巳の湯）、五月五日（端午の湯）などの節句にも別に湯がたてられた。また仏事の際、故人の追善のため施浴の寄進もあった。大湯屋の管理は、湯維那と呼ばれる僧侶を責任者として行われ、経理を担当する湯料所が設けられていた。費用や人手は、年間計画に基づく「湯結番」として東寺の所領から調達された。¹⁸⁾

時代は離れるが、昭和七年（一九三二）、東寺の大湯屋に入浴した文章が残っている。¹⁹⁾ 入浴日は男子は奇数日（一、一一、二一、五、一五、二五）。女子は偶数日（二、六、一二、一六、二二、二六）の朝午前七時から午後四時半までと決まっていた。浴室は五間三尺一寸（約一〇メートル）×七間五尺二寸（一四メートル）の広さで、釜は直径五尺で湯は七〇〇リットル入る。引違戸が二つあり、上は明かり取りのため、下は出入りをするためのものである。下の引違戸から入って二段上がるとスノコの板が置いてある。入り方は腹這いになって頭を下げる、口から息をする、初めの間は入り口に居るのがよい。慣れてくると奥へ行き、頭を徐々にあげる。熱くて苦しくなるようであ

れば、頭を上げる。風呂に入っている間は南無大師遍照金剛を繰り返して唱える。しばらく入ると大量の汗がだらだら流れる。浴室から出た蒸し湯に入る。入浴料は一日二五銭、浴後一日一枚一五銭の借料の布団にくるまって休憩を取る。男女別にそれぞれ六日ずつの日程は、戦後には男性は一日目と二日目の昼まで、女性は二日目の午後のみとなったようである。²⁰⁾

西川義方の入浴記録によれば、東寺は蒸し風呂が中心だったが、薬湯につかる浴槽もあったことがわかる。同様な事例は、京田辺市新里ノ内にある酬恩庵一休寺の浴室にも見られる。酬恩庵浴室（図1）は慶安三（一六五〇）年、前田家によって新築され、中世の寺院の浴室の様相をよく残していると考えられる。正面の扉を開け中に入ると、休憩あるいは脱衣のための広い部屋があり、奥に浴室がある。浴室には数人が入れる蒸風呂形式の小部屋があつて外に釜を設け、横に湯を入れて浸かる桶製の浴槽がある。片隅に竹のスノコがはつてあり、

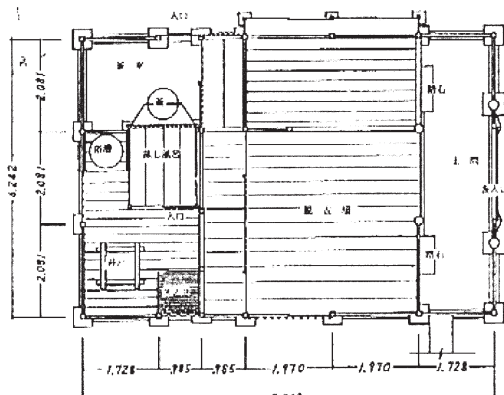


図1 酬恩庵浴室平面図

出典：京都府立山城郷土資料館 『城州一心講とオンマカブロー村のくらしと風呂』

洗い場につかっただと思われ⁽²¹⁾。東寺の大湯屋は、中世・近世の寺湯の伝統を残したものだ⁽²²⁾と考えられる。

このような寺湯は、寺院と僧侶が主体となった一種の社会事業として展開した。それが利用者から料金を取るようになって、営利事業としての意義が大きくなるにつれて、都市の銭湯に近づいていくことになる。では、都市部と異なって銭湯のない農村地域に見られる共同浴の慣行は、寺湯とどのような関係があるのだろうか。

二 寺湯から共同浴へ

(一) 法隆寺の寺湯

東寺の大湯屋は、一貫して寺院と僧侶の管理による施浴事業であり、費用や人手は寺領から調達されていた。しかし法隆寺では、戦国時代に施浴事業の民間委託のようなことが行われていた。天文一八年（一五四九）に法隆寺が東郷の村人と風呂を造営した際に運営のルールや費用などを法細かく定めた「新造修理風呂之事」という文書が残っている（法隆寺蔵）⁽²³⁾。

新造修理風呂事

右件風呂興行之元来者東郷之風呂雖有天満辰巳角刀称番匠衆依有紛之子細五六ヶ年之間令退転了然客僧衆并郷内衆申事仁不混乱彼相論之風呂別段之在所ニ致造立度由衆中多伺申之間下藤分山之内令許可造営之処也然間風呂之材木等一円從衆分所披出也永代衆分之進退無其紛依之為止向後之混乱堅掟旨置畢

一 一番風呂被入学侶中退出之後者可為難風呂事

一 風呂焼日必学侶中坊舎多湯那可相触事

一 一番之風呂之次第毎年仕丁番匠間之衆之内其中之年寄衆拾番親可仕札者如廻■「殿カ」之札可廻於湯子者其宜勝手ニ可相付事

一 諸失墜入目等、客僧番匠間之衆而致勸進造営沙汰畢自今以後破損之時モ同致勸進間之衆番匠仕丁此衆而可加修理於算用聊不可有自由之子細各令一味可遂勘定事

一 大工無之然上者上棟鉋打事其時之番匠衆從衆分被■「探カ」取之処信乃■多聞太郎太夫株ニ■「探カ」取当之間上棟槌打畢向後モ

■「探カ」取可有沙汰事

一 上棟天文十八年己酉八月十一日巳剋于時へ沙汰衆清弘、公文代長芸へ勸進客僧衆各郷民等大工無之ト如此棟木ニ書付沙汰畢

一 風呂屋敷一円下藤分山也雖然風呂一字同「湯那之」屋敷分衆分多所披記置也万一退転之時者速可返契約也

一 東郷衆而若風呂之人数不成者風呂多可入事不可叶者也

右条々守此旨不可有違犯若寄事於左右令違乱速可処嚴科者也仍条々掟旨如件

天文十八年へ己酉へ八月日于時

沙汰衆清弘（花押）

公文代長芸（花押）

この文書によれば、法隆寺東郷の風呂は、天満社（斑鳩神社）の南東の角にあったが、刀称と番匠（大工）衆の間で揉め事があり、五、六年中断していた。客僧や村人の希望で、場所を変えて法隆寺所有の山内

に許可し、材木などは法隆寺の「衆分」の山林から切り出すこととした。風呂屋敷の敷地は（法隆寺の）下藁分の山にあるが、風呂一字と（湯那の）風呂屋敷とは衆分の管轄だ。だから退転する場合は速やかに（寺へ）返却せよ。建物を建てる費用は客僧や番匠衆の勧進ですでに調達済みだが、以後の修理などの費用も勧進でまかなう。風呂を焚く日は法隆寺に知らせ、一番風呂は学侶より入り、後に村人が入る。また、東郷（＝東里）の入浴者が一定の人数集まらない時は入浴を許可しない。風呂の当番は毎年仕丁・大工・間之衆の中の年寄が十番交代で親を務める。（親の）札を順番に廻らす。大工がおらずに上棟や

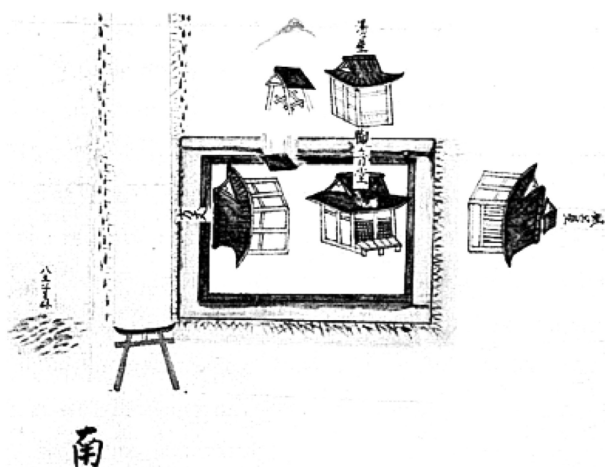


図2 五百井山福安寺伽藍図（部分）

出典：大宮守友「服部神楽講文書の世界」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集

槌打の儀式を行うときは、番匠衆が衆分から選ぶ。ここから、村方などの勧進によつて寺地に風呂を設け、費用、維持管理も村方が負担していることがわかる。実際のところ、法隆寺は風呂屋敷の土地を提供しているだけで、風呂を焚く日程を含めて運営の一切を村方に委託していたといっても過言ではない。

同様な事例は、法隆寺から一キロメートルほど南、現在五百井の集落にあった、五百井山福安寺の施浴風呂にも見られる。斑鳩町服部に伝わる服部神楽講文書のうち「三里道場風呂事」（永正一五 一五一年八月二八日）には、三里（丹後、五百井、服部）の近在二四八人の奉加帳があり、勧進銭の額と名前、在所が列記されている。女性を含めて幅広い層から、一人につき二文から五〇〇文で勧進銭を集め、総額は九貫四三四文におよぶ。風呂釜も村方の寄進であり、風呂焚きの費用や人手も村方の当番が負担した。この風呂は、「石橋の庄五百井山福安寺釈尊院伽藍図」（図2）に見える「風呂屋」を指すと考えられる²³。

このような一種の民間委託によつて営まれる寺湯は、法隆寺の西里に近年まで存在した。「御夢想空風呂」と名付けられたこの蒸し風呂は、大正時代に寺内の西門堂近くから移転し、峯薬師講の人々によつて長く運営された²⁴。昭和二十一年にこの蒸し風呂に入った佐々木茂索によれば、湯銭を払って男女別に分かれた部屋に入り、指図に従つて三疊ばかりの浴室に一斉に横たわると、かけ声とともに盛んに蒸気が送られたようである²⁵。

「御夢想空風呂」のように、薬師講など地元の信仰団体によつて運

営された寺湯は、戦国時代から見られる寺湯経営の民間委託に起源を持つていると考えてよい。そして各種の講によって、寺以外の場所に設置される共同湯が、その過程で現れるのではないだろうか。

(二) 共同湯と講

京都府の南部、向日市から城陽市にかけての村では年中行事の時に風呂をわかつてふるまう行事があった。城陽市の枇杷庄地区の城州一心講は明治九年に始まった東大寺二月堂の十一面観音を信仰する講であるが、毎年一月の五日から三日間、オンマカプロという風呂小屋一式が組み立て式になっている風呂をわかつて接待していた。オンマカという名前は「オンマカキャロニカソワカ」という十一面観音菩薩の真言に由来する。

風呂には講員以外でも厄年の人、家を新築した人、子供が生まれた人などが施主となつて風呂をふるまう場合があった。そのような申し出がない年は講員が輪番で担当した。風呂は前日に施主の家の庭に風呂小屋を組み立てた。中は大小二つの風呂桶が設置され、洗い場のスノコを敷いた。小屋を持たない講では母屋の庇の下に風呂桶を置きまわりをむしろで囲った。毎日朝三時頃から施主とその親戚や講員等が井戸水を汲み、風呂桶に入れて沸かした。施主の座敷には十一面観音の掛け軸を掛け、風呂に入る前に賽銭をあげ拝んだ。それが済むとまず講員から入浴し、その後一般の地区の人々が入浴した。

農小屋を脱衣場にして、風呂小屋へ行き、最初に神の湯と呼ぶ小さい風呂に入り、次に薬草と御香水の入った大きい風呂に入る。薬草は

夏の土用に木津川の衛坊で刈つて乾燥させ、木綿袋に入れて湯にうかべ、御香水は東大寺二月堂のものであることから「二月堂百草湯」とも呼ばれた。薬草の湯は出た後も長く暖かさが続いた。²⁶⁾

京都府長岡京市では大師講による施し湯が行われていた。その様子を『長岡京市史』からたどつてみたい。井ノ内、今里、馬場、開田の大師講は弘法大師を拜む講で、風呂をわかつて村人に入ってもらふことを目的とした。井ノ内では、かつて一月三一日にトウヤの家で、「弘法さんの湯」という風呂の接待をおこなっていた。軒先に周りをムシロで囲んだ鉄砲風呂を男女別々に沸かし、村人に入ってもらった。トウヤでは風呂に入りきた人にボタモチをふるまった。風呂の準備や管理は講員の中から七名ほどのセカタ（世話方）が出て、一切を行うことになっていた。またこの日はトウヤの家では観音講の人々が御詠歌をあげたという。今里の大師講ではかつては箱風呂をわかつていたという。今日では風呂は沸かしていないが、毎月トウヤの家に集まり、御詠歌をあげている。今里の大師講は向日市の寺戸が講元であるとなつていられた。

馬場では、講員が毎月、月番のトウヤの家へ集まり、昼食とともに食べたという。また、かつては毎月一月二一日を中心とした一週間の間、村内のギャ（軒のこと）のある家に頼んで前庭を貸してもらい、風呂を設置して薬の湯を沸かした。この湯には楠の葉を刻んだものを入れたという。風呂には村の人はもちろん、周辺の村からも多くの人が入りに来た。また、風呂の準備と世話は、講員が二、三人で日番制でおこなつたという。

馬場の大師講の共有物はお大師さんの掛け軸で、風呂を設けた家の床の間に飾った。また、風呂に入りに来た老人たちは、掛け軸の前で御詠歌をあげたという。御詠歌には尼講の人たちもよく参加したという。

開田にも大師講があり、かつては一月五日から五日間トウヤの家でお大師さんを祭ると同時に、「薬湯」と呼ばれる鉄砲風呂を沸かして、人々に「施湯」をしていたという。この鉄砲風呂は馬場と共同で使用していたため、開田での「施湯」が終わってから馬場へ運ばれた。²⁷⁾

これらの講による施し湯は、信仰行事として寺湯と共通の起源を持ちながら、寺から独立して村落に場を移したものである。オンマカブロの調査にあたった印南敏秀によれば、東三河地域の共同浴場を利用する組合員は、善光寺講のメンバーと一致するという。²⁸⁾ 山城地域の一心講や大師講による施浴とも共通する要素がありそうである。



図3 山添村毛原
2014年9月筆者撮影



図4 長久寺の碑
2014年9月筆者撮影



図5 大師御夢想湯
出典：『智龍和尚と毛原の里』

（三）寺湯の復活

寺院で施浴を行う寺湯は、遙か昔のことのように思われがちだが、近代になって復活した事例もあるので、紹介しておきたい。

奈良県山添村毛原（図3）の長久寺（図4）は、古くは東大寺戒壇院の末寺に当たり、現在は真言宗東寺派の寺院である。²⁹⁾ 明治七（一八七四）年に住職として迎えられた宝山智龍和尚は、廃仏毀釈のために荒廃していた長久寺の復興に尽力した。明治一三（一八八〇）年、和尚が病の床に臥せていたある夜のこと、夢枕に金色に輝く弘法大師の御姿が現れて「本寺境内裏山ノ山林ヲ開イテ、仏法の興隆ニ一身ヲ捧ゲヨ」との託宣を頂いた。智龍和尚は日夜東奔西走し、明治一五（一八八二）年に「霊場大師山」開基を成し遂げた。³⁰⁾

大正二（一九一三）年に建てた「大師御夢想湯」は石像の大浴場（男女別各二〇数人入浴可能）で、その中央岩組上に弘法大師等身大の座像を安置し（図5）、大師山より湧き出る霊水を引いて銅製ボイ



図6 浴槽と弘法大師の像右奥に
井戸が見える
2014年9月 筆者撮影



図7 浴槽跡
2014年9月筆者撮影



図8 看板2014年9月筆者
撮影 2014年筆者撮影



図9 井戸
2014年9月筆者撮影

ラーで湯を沸かし、大師信仰の一端である洗心施湯の修行道場とした^①。現在でも大師御夢想湯の跡を確認することができる。浴場を囲む塀は取り除かれてはいるが、セメント製の浴槽の跡が残り(図6、図7)「洗心施湯跡」という立て看板がある(図8)。建物から一〇メートルほど離れたところに井戸(図9)があり、そこから水を調達した。「大師御夢想湯」は、一月の初大師、二月の常楽会(涅槃会)、八月の地藏会式を始め、一二月の仕舞大師に至るまで、数々の縁日には幟を立てて必ず湯を沸かし、参詣の男女を無料で開放した^②。殊に三月二日のお大師さんの日には遠方からもお大師さんの湯にあやかると人たちにぎわいを極めた^③。しかし日華事変がおこり、戦時色が濃くなったことで昭和一二年に「御夢想湯」は閉ざされた。寺院が廃仏毀釈から立ち直る際に、寺湯が善男善女を集める手段として復活した、貴重な事例である。

また奈良市富雄にある霊山寺には、薬師湯殿という入浴施設があり、近隣の人々、登山帰りの人々に有料で利用されている。この寺の本堂、堂塔寺仏は鎌倉時代のもので、遣隋使で有名な小野妹子の息子小野富人が弘文元年(六七二)、壬申の乱に関与したため右大臣の職を辞して登美山に閑居し、薬草を栽培し、薬師如来を祀って薬草風呂を施湯したという言い伝えがある。境内には湯屋川という川が流れていることから、古くは寺湯が営まれた可能性もある。一九四二年からトウキ・センキョウ等を用いて薬草風呂を開き、現在に至っている^④。こちらは寺伝にあやかっって復活した、現代の寺湯と言えるかもしれない。

三 寺湯と温泉

(一) 温泉の発見と寺院、薬師堂
前章まで寺湯と共同浴の展開について見てきたが、温泉の場合はど

うだろうか。よく知られているように、温泉は薬師の信仰と密接な関係がある。温泉の源泉に建てられた寺院や薬師堂は、しばしば温泉の発見まで遡る伝説を持っている。

一般に温泉の発見伝説は、大きく次の三つの類型に分けられる。①傷ついた鳥獣が湧き出した温泉で傷を癒すことから発見する。②薬師が夢に現れ、温泉の場所を教える。③旅の僧や流浪の英雄が発見、あるいはお告げを受けて発見する。齊藤純はこれを大きく二つに分け、鳥獣の導きによるものと、異人による発見としている。前者は、鷹や鹿などの鳥獣が水辺で動かないのを不思議に思った獵師や村人が、近づいてみると実は温泉で傷を癒していたのであった、という説明が多い。後者は、村人とは異質な人物、旅の途中に病氣になった貴人、武士、僧侶が、薬師如来や在来の土地神のお告げによって温泉を発見するケースである。⁽³⁵⁾ 発見者として円仁のような高僧の名前があげられる。

こうした縁起をもって、温泉の源泉付近に神社や寺院、仏堂が建てられ、源泉が境内に含まれることも珍しくない。薬師のお告げにより、薬師堂の下を掘ってみると温泉が湧き出したという言い伝えもいくつかある。新潟県阿賀野市の五頭温泉郷のひとつ出湯温泉は曹洞宗華宝寺の薬師堂の下に源泉があり、温泉が湧き出ている。⁽³⁶⁾ また温泉のありかを示した鳥獣が、実は神仏の化身であったと説明され、鳥獣による発見伝説が神仏や高僧の信仰に吸収されることもある。

有名な有馬温泉のさまざまな伝説が、この過程を物語っている。有馬温泉の温泉神社では、大已命（おおなむちのみこと）と少彦名命（つくぬひこなのみこと）が、三羽の傷ついたカラスが水浴びをして

いたことから、温泉を発見したとされている。しかし最も有名なのは、奈良時代の高僧行基にまつわる温泉寺の縁起である。鎌倉時代に書かれた『温泉山住僧薬能記』（弘安二年 一二七九）によれば、行基は有馬温泉に向かう途中で病人に助けを求められ、その病人に食べさせる新鮮な魚を取りに行き自ら料理して与える。数日看病ののち、病人は痛む自分の傷口を舐めて欲しいと頼む。行基は病人の肌を舐める。すると病人は黄金の薬師如来に変わり、「我はこれ温泉の行者也。上人の慈悲を試みるがために、仮に病者の身に現じつるなり」と言い残して去る。行基がこのお告げに従って建立したのが、温泉寺の開創である。行基が源泉の底に薬師如来の石像と『如法経』を埋めたともされる。その御利益により、湯治に訪れる参詣人は厳格な潔斎精進に努めなくてもよいともいう。⁽³⁷⁾

有馬温泉は『日本書紀』にも記述される、きわめて古い温泉であり、行基が発見したわけではない。しかし鎌倉時代にはすでに、本来の発見伝説を押しつけるようにして、温泉と寺が分かちがたく結びつけられていたことがわかる。湯治は病氣治癒のために潔斎して薬師に願かけを行う宗教的な行事となり、温泉自体が一種の寺湯となったのである。

（二）湯治と医療

『温室経』には、入浴中に七つの道具を用いて七つの病気を除けば、七つの福が得られると説かれている。寺院で行われる蒸し風呂や沸かし湯による施浴は、基本的には一日ごとであるのに対し、温泉での湯

治は七日を一つの単位として二まわりから三まわり滞在して治療を行う。七日を単位とする湯治は、鎌倉時代に描かれた『是害房絵巻』の詞書にも書かれており、かなり古くから定着した習慣だったと考えられる³⁸⁾。

有馬温泉の温泉寺では、参籠になぞらえた規則を設けて入浴法を教える「湯文」が作られ、江戸時代には僧侶が湯治客に読み上げて知らせていた。『温泉湯治養生記』（慶長十年 一六〇五）によれば、湯治の際の決め事が一五カ条にわたり記され、湯に入る前には般若心経一卷、薬師の名号、観音の法号を唱え、急ぐ場合でも、薬師の名号を八回唱えるようにとされている³⁹⁾。入浴する前にお経や名号を唱える点では、寺院での施浴や、オンマカ講や大師講での施し湯の入浴法とも通じるものがある。

このような寺院による温泉の管理には、二つの歴史的意義がある。まず、温泉が神仏の名のもとに管理されることよって、地下資源としての温泉の公共性と平等性が確保されたことである。温泉は、僧侶だけでなく地域に住む俗人、さらに遠方から来る参詣客に対しても、広く開放されなければならない。もう一つの意義は、寺社による温泉の管理を通じて、利用者に費用の負担を求めることができたことである。多くの温泉で、直接に入浴料を徴収することを避け、薬師さまへのお灯明料として湯銭を集めて、浴場や薬師堂などの維持・修理の費用に充てていた。この背景には、神仏の恵みである温泉は、本来誰にでも無料で開放されるべきだという宗教的前提があった。

江戸時代、寺社参詣や病氣治療を目的とした湯治は、道中手形を発

行してもらう立派な理由となり、江戸後期には全国の温泉の番付が作られて、効能が一覧できるまでになった。明治時代になると、全国の温泉の成分が調査され、温泉の効能が科学的に分析されるようになる。温泉地では、政府機関によって調査された温泉の成分表を掲げ、次第に西洋医学の病名でその効能を唱うようになっていった⁴⁰⁾。こうして温泉の効能は神仏のご利益を離れ、温泉の管理や運営も寺社の手を離れていく。また小規模な温泉では、江戸時代から薬師堂を中心として村方の手で管理されている場合も多い。次にその事例を見てみよう。

（三）温泉の薬師堂と講

温泉が地元の村方によって管理されてきた事例として、筆者が調査した新潟県十日町市の松之山温泉を取り上げてみたい。松之山温泉は新潟県の南西部、長野県との境を接する場所に位置する。温泉街には旅館が一一軒あり、「鷹の湯」という共同湯がある小さな温泉地である。泉質はナトリウム・カルシウム―塩化物泉（弱アルカリ性）で、江戸時代の温泉番付にも前頭で登場する歴史ある温泉地である。

松之山温泉の湯本地区に残る薬師堂の創建年代は不明であるが、江戸時代の絵図で確認できる。また、元禄八年（一六九六）には温泉の利用者が払う湯銭が薬師堂のお灯明料として集められており、この時期には薬師堂が湯本地区と共同湯に関わる重要な役割を果たしていたことがわかる。町史によれば、この薬師堂の本寺は陽光寺で、もと湯本町の大庄屋であった村山家の寺であった。現在の薬師堂は明治二五（一八九二）年に焼失し、翌年に再建されている。現在、堂の内部に

は薬師瑠璃光如来、日光菩薩、月光菩薩、十二神将が奉られている。

庄屋の村山家は代々湯本の薬師堂と温泉の管理を行い、旅籠から集めた湯銭を諸費用にあて、領主である高田藩への上納金である「出湯役」を納めていた。村山家に伝わる古文書には、湯治客の道中手形の写しも見られる。享保二〇年（一七三五）の文書によれば、旅籠が湯銭や宿賃を取り決めよりも高く取っていたことが発覚し、旅籠の主人たちが薬師堂に集められて、血書をもって庄屋に詫び状を入れたという。温泉に関わる重要な寄り合いや意志決定が、薬師堂で行われていたことがわかる。薬師堂は日頃は無人であり、旅籠に宿泊を断られた旅人が、密かに寝泊まりすることもあった。

明治以降、ここでは源泉の所有権をめぐる裁判がおり、新たな源泉も開鑿された。薬師の名のもとで維持されてきた温泉の公共性が、希薄化していったと思われる。とはいえ、明治以降の新たな源泉にも薬師堂が建てられており、温泉に薬師をまつる慣例は途絶えていない。湯本地区には最近まで薬師講があり、女性を中心とした集まりを持ち、お経を唱えたあと、持参した弁当類を開いて話をする交流の場となっていた。メンバーが高齢化して講が消滅したため、現在湯本の薬師堂は温泉組合の管理となっている。

前章まで見てきたように、寺院が管理する寺湯は、法隆寺の「御夢想風呂」や一心講によるオンマカブロ、東三河の善光寺講による共同風呂など、講によって管理される共同浴とゆるやかに繋がっていた。この過程は、松之山温泉のような温泉地においても、同様に見られるように思われる。

おわりに

以上、本稿の所論を要約しておきたい。奈良時代、『温室経』の伝来とともに、七堂伽藍の整った大寺院には浴室がおかれ、衆僧の潔斎に使われるだけでなく、一般の人々にも開放され、「施浴」と呼ばれた。これが寺湯の始まりであり、「施湯」「施し湯」とも言われた。京都の東寺では大湯屋における施浴が中世から昭和まで続いたが、蒸し風呂と浴槽の両方を用いる湯屋の構造は、江戸時代から変わっていない。

法隆寺東里で一六世紀以来営まれた寺湯は、村方の勧進によって寺地に風呂を設け、費用や維持管理、風呂を焚く日程の決定まで村方が負担しており、寺湯の民間委託のような方式であった。ほぼ同時期に設けられた近隣の五百井福安寺の風呂も、村人の勧進によって建築され、利用されており、戦国時代にはこのような寺湯が珍しくなかったと考えられる。法隆寺の西里の「御夢想空風呂」もこのような寺湯の一つだが、近代になると地元の家薬師講の管理下で一九九〇年まで利用されていた。

京都府城陽市を中心に分布する城州一心講のオンマカブロは、宗教的意味を持つ施浴が、近代の村で講組織を中心に続いた事例である。また山添村長久寺の「大師御夢想の湯」のように、廃仏毀釈によって荒廃した寺院の復興事業の中で、意図的に寺湯が復活した事例もある。寺湯は遠い過去の出来事ではなかった。

各地の温泉にも薬師をまつる寺院や堂が一般的に存在する。温泉の

発見や普及に寺院や僧侶が関与した事例は、有馬温泉をはじめとして数多く見られるが、これは温泉が一種の寺湯として機能したことを物語る。村方が管理する温泉においても、源泉付近に建てられた薬師堂を中心として、温泉の公共的利用が行われてきた。新潟県の松之山温泉に残る薬師堂と薬師講に見られるように、寺湯と講による共同浴の展開過程は、温泉地においても確認できる。

従来、入浴の歴史に関する研究は、資料の多い都市部の銭湯の起源と展開を中心に行われてきた。しかし本稿の検討の結果、近年まで存在した寺湯や、農村部の各種の講によって営まれた共同浴は、中世・近世を通じて密接に関連しており、温泉もその例外ではないことが明らかになった。これが有力寺社の多い京都や奈良に特徴的なことであるのか、それともっと広がりを持つのか、さらに今後の調査と研究が必要である。

〔注〕

- (1) 武田勝蔵『風呂と湯の話』塙新書 一九六七
- (2) 武田勝蔵『風呂と湯のこぼれ話』村松書館 一九七七 二〇頁
- (3) 「フロの起源」『柳田國男全集 第二十四巻』筑摩書房 一九九九 五三七頁
- (4) 藤浪剛一『東西沐浴史話』人文書院 一九三二
- (5) 落合茂『洗う風俗史』未来社 一九八四
- (6) 八岩まどか『温泉と日本人』青弓社 二〇〇二
- (7) 山内昶・山内彰『風呂の文化史』文化科学高等研究院出版局 二〇一
- (8) 八木透『京における初冬の行事と火への祈り―御火炊と大根炊を事例

として―

佛法僧論集』二〇一三

- (9) 『柳田國男全集 第一七巻』筑摩書房 一九九九 四七九頁
- (10) 前掲注(1)、一四頁
- (11) 神塚淑子『仏典『温室経』と道典『洗浴経』』『名古屋大学文学部研究論集(哲学)』六〇、二〇一四、二頁
- (12) 長沼賢海『日本の文明と佛教』大鐙閣 一九一九 一一八頁
- (13) 前掲注(2) 一九頁
- (14) 藤井正雄『佛教儀礼辞典』東京堂出版 一九七七 六二―六四頁
- (15) 前掲注(1) 一四頁
- (16) 前掲注、一一七頁
- (17) 『特別展 ゆ お風呂の文化史』埼玉県立博物館 一六頁
- (18) 橋本初子『大師信仰と東寺の湯』『中世東寺と弘法大師』思文閣出版 一九九〇所収 二〇二―二二二頁
- (19) 西川義方『東寺の蒸風呂』『温泉須知』診断と治療社出版 一九三七所収 一四九頁
- (20) 前掲注(18)、二〇五頁
- (21) 京都府立山城郷土資料館『企画展 城州一心講とオンマカブロー村のくらしと風呂』一九九三、一六頁
- (22) 折橋俊英『法隆寺の至宝 第八巻 ―昭和資料帳―』小学館 一九九
- (23) 大宮寺友『服部神楽講文書の世界』『国立歴史民俗博物館研究報告』第一一二集、二〇〇四年、五三二頁
- (24) 斑鳩かわら版ぼっぼ二〇〇号、一九九一年十一月
- (25) 佐々木茂索『法隆寺入浴記』『佐々木茂索随筆集』文藝春秋社 一九六七 二九―三五頁
- (26) 『城州一心講とオンマカブロー』、一二頁
- (27) 長岡京市史編さん委員会『長岡京市史 民俗編』一九九二 六一―六三頁
- (28) 印南敏秀『共同浴の世界 東三河の入浴文化』愛知大学総合郷土研究

所ブックレット五 二〇〇三

(29) 山添村史 上巻 一九九三、第一法規出版、七〇〇頁

(30) 山中清兵衛『智龍和尚と毛原の里』山添村毛原区、二〇〇一、七頁

(31) 前掲注(29)、八一二頁

(32) 前掲注(30)、二頁

(33) 前掲注(29)、八一二頁

(34) 霊山寺ホームページより <http://www.ryosenji.jp/yakushiyu.html>

(35) 斉藤純『温泉発見伝説』『日本「神話・伝説」総覧』歴史読特本特別増刊・事典シリーズ第一六号 新人物往来社 一九九二

(36) 伊藤克己『湯の底の記憶―温泉の歴史学』『温泉を読む』講談社 二〇一一 30頁

(37) 神戸市立博物館『有馬の名宝―蘇生と遊興の文化―』一九九八 一二頁

(38) 曼殊院蔵『是害房絵巻』（一四世紀）詞書第三段に「カクテ一七日ニモ成ヌレハ心モヤウヤウナヲリ身モスコシタワヤケリ」とあり、七日単位の湯治が有効であることがわかる。『新修 日本絵巻全集』第二七巻 角川書店一九七八、一〇〇ページ参照。

(39) 小澤清躬『有馬温泉史話』五典書院 一九三八 九六頁

(40) 拙稿「温泉の効能から見た伊香保温泉の近代化―温泉番付、錦絵、温泉案内をてがかりに」『観光学評論』vol12―2 二〇一四

（たるい ゆき 非常勤講師）

二〇一六年十一月十五日受理